123483

日文 701672359

中国古典文学大系 21

水洛陽伽藍記 経注（抄）

楊衒之著　入矢義高 訳

森鹿三・日比野丈夫 訳

大连外国语学院图书馆 藏书

平凡社

者紹介

児島県生。京都大学文学部卒。
中国文学。主要著訳書「寒
中国詩人選集』)『元曲選釈』第
上語録」(筑摩書房『禅の語録』)

徐　毘二　明治39年兵庫県生。京都大学文学部東洋史学科卒。専攻　東洋史学。京都大学名誉教授。現職　仏教大学教授。同副学長。主要著論文　『東洋学研究一歴史地理篇一』(東洋史研究会)『アジア歴史地図』(平凡社)「居延漢簡研究序説」(『東洋史研究』13-3)

日比野　丈夫　大正3年京都府生。京都大学文学部史学科卒。京都大学名誉教授。専攻　東洋史。現職　追手門大学教授，日本学術会議会員。著書　『五台山』(共著，座右宝刊行会)『蒙疆考古記』(共著，星野書店)『山西古蹟志』(共著，中村印刷出版部)『華僑』(共著，日本放送出版協会)

藤善　真澄　昭和9年鹿児島県生。鹿児島大学文理学部東洋史学科卒。京都大学大学院修了。専攻　東洋史学。現職　関西大学教授。主要著論文　『安禄山と楊貴妃』(清水書院)「官吏登用における道挙とその意義」(『史林』51巻6号)

勝村　哲也　昭和12年京都府生。神戸大学文学部東洋史学科卒。京都大学大学院修了。専攻　東洋史学。現職　京都大学助教授(人文科学研究所)。論文　「後漢における知識人の地方差と自律性」(『中国中世史研究』)「魯迅所見書考」(『鷹陵』43)

中国古典文学大系　全60巻

洛陽伽藍記・水経注(抄)　第21巻

昭和49年9月1日　初版第1刷発行
昭和52年6月1日　初版第5刷発行

訳者　入矢義高　森鹿三

発行者　東京都千代田区四番町4番地　下中邦彦

発行所　郵便番号　102　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京8-29639　株式会社　平凡社

不良本のお取換えは直接小社サービス課までお送り下さい(送料は小社で負担します)。
定価は外箱に表示してあります。

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社　石津製本所

© 株式会社　平凡社　1974　Printed in Japan

目次

洛陽伽藍記……一

水経注（抄）……一一七

河水篇巻一……一一九
河水篇巻二……一四六
河水篇巻三……一八九
河水篇巻四……二一三
河水篇巻五……二四七
洛水……二八五
伊水……二九八
瀍水……三〇四
澗水……三〇五
穀水……三〇六
甘水……三二五
漆水……三三六
滻水……三三八
沮水……三三八
渭水一……三三〇
渭水二……三四六
渭水三……三五三

解説……三七九

洛陽伽藍記

楊衒之撰
入矢義高訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

魏の撫軍府司馬楊衒之撰

三墳・五典[注一]といわれる古書の説も、また諸子百家の議論も、そこに説かれる道理は人間世界の枠内のことであって、それを超えた次元には関わらない。しかし一乗・二諦[注二]の理法や、三明・六通[注三]の趣旨となると、西方の国々では詳しく説かれているのに、中国では書き著わされたことがない。

項に日の光を具えた仏が夢に現われ、[注四]その満月の如き顔が輝きわたってからは、洛陽の開陽門に白毫の仏像を荘厳し、[注五]御陵に紺髪の仏のお姿を描くことになり、それ以来、人々は争って仏に帰依し、かくてその信仰は中国に広まった。下だって晋の代の永嘉年間には、寺はまだ四十二[注六]だけであったが、わが大いなる魏の天下となって、洛陽に都を定めてからは、その崇信はいよいよ遍く、教えはますます盛んとなった。

王侯や貴臣は、あたかも靴をぬぎ捨てるように象や馬を寄進し、士民や富豪は、まるで自分の足跡を忘れ去るように財宝を喜捨した。かくて寺院は軒をならべ、堂塔は列をなし、競って天上のお姿を写し取り、[注七]争って山中の御影を摹写した。[注八]金刹は霊台と高さを競い、[注九]講堂は阿房と規模を同じくした。[注一〇]「木に錦繡を着せ、土を朱紫で蔽う」[注一一]どころの沙汰ではなかった。

永熙の世の動乱に、[注一二]帝が鄴に遷都されると、寺々の僧尼たちも同時にそちらへ移っていった。武定五年、丁卯の歳になって、[注一三]私は役向きの旅の道すがら、再び洛陽を見る機会を得たが、城壁は崩れ落ち、宮殿は傾き倒れ、寺院は灰燼に帰し、廟塔は廃墟となっていた。塀は八重むぐらに蔽われ、巷には荆が生い茂り、荒れた階には野獣が住みつき、庭の木々には山鳥が巣くっていた。遊んでいる子供や牧童たちは、都の大通りをうろつき廻り、農夫や老いた耕作人らは、宮城の門のところで黍を刈っていた。さてこそ、あの「麦秀の思い」[注一四]は殷の廃墟を見た古人だけの話ではないこと、また「黍離の悲しみ」[注一五]は正しく周の滅亡の実感であったことを思い知ったのである。

都の内外の千をも越えた寺々は、今やがらりとした廃墟となり、鐘の音は聞こえることもない。これでは後の世に伝わらずじまいに終ると思い、そこでこの記録をものした次第である。とはいえ、寺の数はなかなかに多く、とても全部は書き切れぬため、ここに書き留めたのは大伽藍だけにとどまる。中小の伽藍については、不思議な話との関わりだけで取り上げ、ついでに世俗の事どもを引き合いに出しておいた。先ず城内から書き起こして、次いで城外に及んだが、門の名を一つ一つ書き出すことで遠近の目印とした。全部で五巻から成る。しかし私は著述の才ではないから、遺漏が多いことであろう。どうか後の博雅の士は、足らぬところを明らかにしていただきたい。

太和十七年（四九三）、高祖が洛陽に遷都せられるや、司空の穆亮に詔して宮殿を造営せしめられたが、洛陽の城門の名は、魏・晋の時の旧名をそのまま用いることになった。[注一六]東面に三門がある。

その最も北側の門を建春門という。

漢代には上東門といった。阮籍の詩に「歩みて上東門を出づ」[注一七]とあるのがそれである。魏・晋では建春門と呼んだが、高祖はその名のままにして改めなかった。

その南側のを東陽門という。
漢代では中東門といった。魏・晋では東陽門と呼んだが、高祖はその名のままにして改めなかった。
その南側のを青陽門という。
漢代では望京門といった。魏・晋では清明門と呼んだが、高祖は青陽門と改めた。
南面に四門がある。
その最も東側の門を開陽門という。
漢の光武帝が洛陽に遷都した時、この城門を作って完成したばかりで、まだ名を付けていなかったところ、忽ち夜なかに柱が飛んできて楼上に収まった。のち琅邪郡の開陽県から、県城の南門の柱が一つ飛び去ったという報告があり、そちらから検分に来させたところ、まさにその柱であった。そこで開陽という名を付けることにした。この名は魏から晋までそのまま用いて改めず、高祖も同様であった。
その西側のを平昌門という。
漢代には平門といった。魏・晋では平昌門と呼び、高祖はその名のままにして改めなかった。
その西側のを宣陽門という。
漢代には小苑門といった。魏・晋では宣陽門といい、高祖はその名のままにして改めなかった。
その西側のを津陽門という。漢代には津門といった。魏・晋では津陽門と呼んで、高祖はその名のままにして改めなかった。
西面に四門がある。
その最も南側の門を西明門という。
漢代には広陽門といい、魏・晋はその名のままにして改めなかったが、高祖は西明門と改めた。
その北側のを西陽門という。
漢代には雍門といい、魏・晋では西明門と呼んだが、高祖は西陽門と改めた。
その北側のを閶闔門という。
漢代では上西門といい、その上に銅製の天体観測機器が置かれ、日月星辰の運行を計った。魏・晋では閶闔門と呼び、高祖はその名のままにして改めなかった。
その北側のを承明門という。
承明というのは、高祖が立てたもので、金墉城の前の東西の大道に面していた。遷都の当初は、宮殿が未完成だったので、高祖は金墉城に仮り住まいしておられた。その城の西に王南寺があり、高祖はしばしばこの寺に出かけて、僧侶たちと談義したので、この門を設けることになったが、まだ名を付けていなかった。世間ではそれを新門と呼んでいた。その時、王公や公卿たちは、いつもこの新門で帝をお迎えする習わしだったが、高祖は御史中尉の李彪に向かって、「曹植の詩に『帝に承明の廬に謁す』とある。この門は承明という名にするとよい」と仰せられたので、この名が付くことになった。
北面に二門がある。
西側のを大夏門という。
漢代には夏門といった。魏・晋では大夏門と呼び、〔高祖はその名のままにして改めなかった〕。宣武帝は三層の門楼を作り、地上二十丈の高さがあった。洛陽の城門の楼はみな二層で、地上百尺であったが、この大夏門だけは雲にも届かんばかりの甍であった。

東側のを広莫門という。

漢代には穀門といった。魏・晋では広莫門と呼び、高祖はその名のままにして改めなかった。広莫門から西へかけて、大夏門に至るまでの間は、宮観が建ちならんで、城壁の上に覆いかぶさらんばかりであった。

一つの門から通ずる大道は三道から成り、いわゆる九軌の道幅である。

注

一 三墳・五典 『左伝』昭公十二年の条に見られる古代の書物の名であるが、その内容の具体的なことは分からない。漢の鄭玄は三皇・五帝の書だというが、憶測の説にすぎない。

二 一乗 『法華経』方便品に、「十方仏土の中、ただ一乗の法あるのみにして、二もなく亦た三もなし」という。仏の教えの根本義を指していう。

三 二諦 世諦（世俗諦）と真諦（第一義諦）。世俗の真理と、超世俗の真理。仏の教えはこの二諦を踏まえつつ一乗法に帰一せしめるものとされる。

四 三明 三達ともいう。過去の宿業を見通す宿命明、未来の生死因果を見て取る天眼明、現在の煩悩の根源を看破して断滅する漏尽明をいう。

五 六通 六種の神通力。身通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通・漏尽通。

六 項に日の光…… 漢の明帝が夢で金色に輝く神人（仏）を見たという伝説。『牟子』理惑論に見える。これが仏教が中国にはいった最初の契機とされる。「項の日の光」とは、いわゆる光背のこと。

七 白毫 仏の具えているめでたい相好の一つで、白く抜きんでて生えた眉毛。下句の「紺髪」も寿相の一つで、紺青の頭髪をいう。

八 御陵 明帝は生前に築かせた顕節陵に仏の図像を画かせたという。やはり『牟子』理惑論に見える。

九 寺はまだ四十二だけ 『魏書』釈老志に、「晋の世、洛中の仏図は四十二所なりき」とある。

一〇 靴をぬぎ捨てるように 下句の「自分の足跡を忘れ去るように」と共に、いとも易々と、造作もなく、という意味の喩え。

一一 天上のお姿…… 忉利天に生まれかわった母の摩耶夫人のために釈尊が天上に昇って法を説いたという故事があり、その間に優塡王が釈尊の像を作らせたという。これが仏像制作の始めとされる。従って、ここは仏像を作ったことを指していう。

一二 山中の御影…… 釈尊が雪山のなかで六年苦行を重ねた時の姿を、画像や壁画にかいたこと。

一三 金刹は…… 金刹は仏塔の頂きに立てる金色の旗竿をいうが、広く仏寺のことをもいう。霊台は『水経注』の穀水の条によると、漢の光武帝が雲気を望むために築いたもので、高さ六丈、方二十歩あったという。これを雲台とするテキストがあるが、それに従えば、漢の明帝が功臣二十八将の像を画いたという台のことである。

一四 講堂は…… 原文は「講殿」。いま神田博士の解に従って講堂の意とする。阿房は秦の始皇帝が建てた広壮な宮殿の名。

一五 「木に錦繡を着せ……」 後漢の張衡の「西京賦」の「木に綈錦を衣せ、土に朱紫を被らす」という句による。色も鮮やかに贅を尽くした輪奐の美をいう。

一六 永熙の世…… 孝武帝の永熙三年（五三四）七月に帝は斛斯椿に迫

られて長安に逃れ、十月に高歓に擁立されて孝静帝が立つと、直ちに鄴に遷都した。これからが東魏の世。

一七　武定五年……　五四七年。『魏書』孝静帝紀によると、武定元年に北豫州の刺史の高仲密が叛し、それを南陽王元宝炬の子の突と、宇文黒獺とが支援して洛陽に迫ったのを、高歓が迎え討って破った。またその前の五六年にも、東魏の侯景らの軍が北魏の独孤信を洛陽に包囲した時も、城の内外の宮寺はすべて火災にかかり、市民の二、三割しか生き残らなかった。

一八　「麦秀の思い」　箕子が周に使いして、殷の都の跡を通りかかり、自分の父母の国だった殷の廃墟に今は麦が生い茂っているさまを見て深い悲しみに沈んだという故事（『史記』宋微子世家）。

一九　「黍離の悲しみ」　周の太夫が使いの道すがら、かつての周の都の宗周の廃墟を通りかかり、ただ一面の黍畑になっているさまを見て悲しんだという故事（『詩経』黍離の詩の序）。

二〇　魏・晋の時の旧名を……　しかし必ずしもそうでなく、高祖が改めた門の名もあることは、後文で見られる通りである。

二一　阮籍の詩に……　その詠懐詩のなかの一首。『文選』李善注には『河南郡図経』を引いて、「東に三門あり、最北頭を上東門という」といっている。

二二　漢代には……　以下の注は各テキストすべて欠けている。『水経注』『太平寰宇記』によって校補した周祖謨氏の本文に従って補う。

二三　その西側の……という　この句も各テキストみな欠けている。『元河南志』によって校補した周氏の本文に従って補う。

二四　金墉城　これのことは巻一の瑤光寺の条にも見える。『水経注』穀水の条によると、魏の明帝が洛陽城の西北角に築いたものである。

二五　遷都の当初は……　高祖は太和十九年（四九五）に平城から洛陽に遷都し、ひとまず金墉城を改修して宮殿とした。

二六　高祖はしばしば……　高祖は拓跋族の出身ながら、読書を好んで教養広く、とくに老荘と釈家について談論することを好んだ（『魏書』本紀、韋纘伝、裴宣伝など）。

二七　曹植の詩　その「白馬王彪に贈る」詩。

二八　〔高祖は……改めなかった〕　周氏の校本に従って補う。

二九　宣武　各本ともこの二字を欠く。范祥雍氏の校注では、『元河南志』巻三によって「世宗」（宣武帝の廟号）の二字を脱していると推定し、周氏も同書によって「宣武」二字を補った。いま周氏に従う。

三〇　広莫門　「広莫」とは、北から吹きつける大風。この門の北面には山山が連なりそびえ、それを越えて北風が吹きおろすので、この名を付けたのであろう。

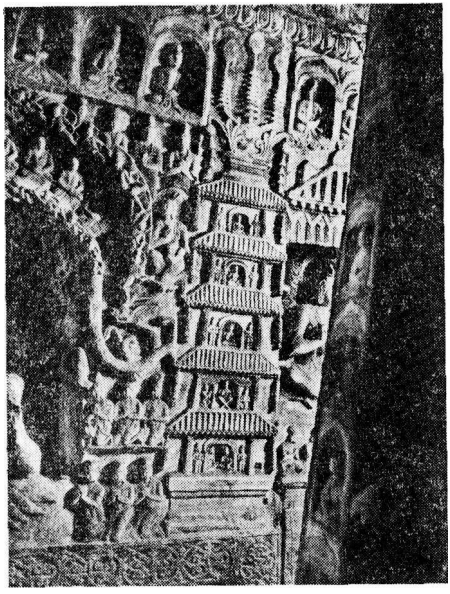
三一　一つの門から……　『太平御覧』一九五に引く晋の陸機の『洛陽記』によると、宮門および城中の大道は、みな三つに仕切られていて、中央が御道で、両側に高さ四尺余の土墻が築かれていて、公卿高官の者のみの専用通路となっていた。それの両端の通路が一般人用で、左側のを通って入り、出る時は右側を通るという定めであった。道の両端は槐や柳の並木になっていたという。あとの「九軌」とは、九輛の車の並ぶ幅があったこと。

洛陽伽藍記巻第一

城内

永寧寺は、熙平元年（五一六）に霊太后の胡氏[注一]が建てた寺である。宮城の正面の閶闔門から南へ一里、御道の西側にあった。

寺の東に太尉府[注二]があり、南は昭玄曹[注三]と境し、北は御史台[注四]と隣あっていた。閶闔門の前では、御道の東に左衛府[注五]があり、その南に司徒府[注六]があった。司徒府の南には国子学[注七]があり、その堂内には孔丘の像が祀ってあって、かたわらに仁を問う顔淵の像と、政を問う子路[注八]の像があった。国子学の南に宗正寺[注九]があり、その南に太廟[注一〇]があり、その南に護軍府[注一一]があり、その南に衣冠里があった。



雲岡石窟　第6洞　塔の浮彫

御道の西には、右衛府[注一二]があり、その南に太尉府[注一三]があり、その南に将作曹[注一四]があり、その南に九級府[注一五]があり、その南に太社[注一六]があり、その南に凌陰里があり、ここは四朝[注一七]の時の氷室のあったところである。

この境内には九重の塔が一基あって、木を組み上げて建てられ、高さは計九十丈[注一八]。頂きには更に金色の刹竿（相輪）が十丈、全部で地上千尺の高さになり、都から百里離れたところからでも望見できた。当初、塔の基礎工事で地を掘り下げて地下水に達した時、黄金の仏像三十二体[注一九]を得た。太后はこれを信心のしるしだとし、そこで塔の造営が並はずれたものとなったのである。刹竿の上に金の宝瓶があり、二十五斛の容積があった。宝瓶の下には承露金盤が十一重つらなり、それらをぐるりと包んで金の鈴が垂らしてあった。さらに鉄の鎖四本で刹竿を塔の四角に繋ぎ留めてあったが、その鎖にも金の鈴が取りつけてあり、その鈴の大きさは石甕ほどもあった。塔は九重で、そのどの四角にも金の鈴が吊され、上下全部を含わせると百三十もあった。その塔は四角形で、一面ごとに三つの戸と六つの窓があり、戸はみな朱の漆塗りであった。その扉にはそれぞれ金の釘[注二〇]が五列に打ちつけられ、合わせて五千四百箇になった。またそれらには金環鋪首[注二一]が付いていた。建築技術の粋を尽くし、造形美術の妙を極めたこの荘厳の精巧さは、この世のものとも思えず、彫りのある柱や金の鋪首は、見る人の目を驚かし心をゆさぶった。風のある秋の夜などは、金の鈴の音が響きあって、その鏗鏘たる調べは、十余里にまで聞こえた。

塔の北に仏殿が一つあり、作りは太極殿に似ていた。その中に一丈八尺の金の仏像一体、等身大の金の仏像十体、真珠をちりばめた仏像三体、金糸で織り上げた仏像五体、玉の仏像二体があり、その精巧な作りは当時最高のものであった。僧房と楼観は合わせて千余間、彫り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のある梁に白い壁、彩飾された扉と彫りのある櫺窓など、とても言葉では言い表わせない。桔や柏や椿や松などが簷ばに生い茂り、竹叢や香草が墻塀のあたりを包んでいた。それで常景の碑文に「須弥山の宝殿も、兜率天の浄宮も、これに勝るものなし」と賛えたわけである。外国から献上された経典と仏像は、みなこの寺に納められていた。寺の周りの塀にはすべて短い椽を組んで、その上を瓦で覆ってあって、当今の御所塀のようであった。東西南北にそれぞれ門が一つあり、南門は三層の楼門で、三本の階段通路があり、高さは地上二十丈。その作りは今の端門に似ていた。雲の図が画かれ、それに仙人や神霊の色鮮やかな姿も画かれて、彩飾の扉には銭を並べたように金具が連なり、目にもまばゆい華麗さだった。拱門には四力士と四獅子があり、金銀で飾った上に珠玉がちりばめられ、その燦然たる荘厳は、この世では嘗て聞かぬものであった。東と西の二門もこれと同様であったが、ただ南門と異なるのは、楼閣が二層造りであることだけであった。北の門だけは上に楼閣を設けず、烏頭門に似ていた。

これら四門の外側には、みな緑濃い槐が植えられ、青々とした水がめぐらしてあって、都を行く人たちは、たいていその木蔭で涼を取った。道に舞い上がる埃がないのは、雨雲の潤いのせいでなく、清風が涼気を運んできてくれるので、わざわざ団扇を使う必要もなかった。

中書舎人の常景に詔して、この寺の碑文を作らしめられた。

景は、あざなは永昌、河内の人であった。俊敏な上に博学で、名を天下に知られていた。太和十九年（495年）、高祖に見こまれて、律博士に抜擢された。刑法に関することや難事件については、たいてい景に意見を徴した。正始の年の初めに、律令を制定して、魏の永代の法典とするよう詔が下だり、勅によって治書侍御史の高僧裕、羽林監の王元亀、尚書郎の祖瑩、員外散騎郎の李琰之らと共に、その編纂に従事した。また太師の彭城王勰、青州刺史の劉芳にも命が下だって、その事業に参加せしめられた。景は厳正に条令を定め、古今を勘案して、見事に体系を組み立て、いま世に行なわれている。現在の律二十篇がそれである。また劉芳と共に、洛陽の宮殿と門と楼閣の名称、および道路と里邑の名称を制定した。都から出て長安の令に任命された時、当時の人は彼を潘岳になぞらえたものだった。そののち中書舎人・黄門侍郎・秘書監・幽州刺史・儀同三司に歴任した。学問に従っている青年たちは、〔このような先輩の出たことを〕自分たちの栄誉とした。景は内にあっては側近に仕え、外に出ては藩侯にまでなったが、その私生活はつつましやかで、農家のそれと同じであった。ただ、車に満載できるほどの経書と史書が書架をうずめていた。その著わした文集は数百篇余りあり、給事中の封暐伯の序文を付けて世に行なわれている。

造営が完成すると、明帝は太后と共にこの塔に登った。見下ろすと宮中は手の平の内のように見すかされ、都全体の眺めが家の庭を見るようであった。宮中が丸見えになるというので、この塔に登るべからずという禁令が出された。私は以前に河南尹の胡孝世と共に登ったことがあるが、「下、雲雨に臨む」とは誠に誇張ではないと実感したものだった。

このころ西域の僧で菩提達摩という者がいた。ペルシャ生まれの胡人であった。彼は遙かな夷狄の国を出で立って、わが中国へ来遊したが、この塔の金盤が日に輝き、その光が雲表を照らしているのを見、また金の鈴が風を受けて鳴り、その響きが中天にも届くさまを見て、思わず讃文を唱えて、まことに神業だと歎称した。その自ら言うところでは、年は百五十歳で、もろもろの国を歴遊して、足の及ばぬ所はないが、この寺の素晴らしさは閻浮には又とないもの、たとい仏国土

を隈なく求めても見当たらぬと言い、口に「南無」と誦しつつ、幾日も合掌しつづけていた。

孝昌二年（五二六）のこと、大風が吹いて屋根を剝ぎ木を抜くほどであったが、塔の刹竿の上の宝瓶が吹き落とされ、地下一丈余りの深さにめり込んだ。そこで再び職人に命じて新しい宝瓶を鋳作らせた。

左　胡俑（こよう）　北魏　山西省大同出土
上　鎧馬武士俑　北魏　洛陽元邵墓出土

建義元年（五三八）、太原王の尒朱栄が軍隊をこの寺に集結した。

栄は、あざなは天宝。北地の秀容の人であった。その家は代々、第一領民酋長で、博陵郡公に封ぜられていた。その勢力下の部落は八千余、家には数万頭の馬があり、一等国にも等しい豊かさであった。

武泰元年（五二八）二月に孝明帝（粛宗）が崩じ、子がなかったので、臨洮王の嫡子の釗を立てて帝位を継がせた。年は僅か三歳だったので、太后が朝権を握ろうとたくらんで、これを立てたのであった。栄は并州刺史の元天穆に言った、「皇帝が崩御された時、年は十九であらせられたが、それでも国中の人々は幼君だと言っていた。ところが、なんと今は物も言えぬ子を押し立てて帝位につけ、天下を鎮めようと図っている。とても話にはならぬ。私は代々魏の国恩を受けておるからには、国が破滅するのを坐視してはおれぬ。これから鉄騎五千を率いて、先帝の御陵にお参りし、兼ねて、先帝崩御の事情を侍臣どもに問いただしたい所存だ。君は一体どう思うか」。穆は答えた、「貴下は代々并州と肆州の刺史を世襲せられた名族、抜群の雄才の持ち主。しかも部落の民は、弓を取るもの一万。もし天子廃立の大事をなし遂げられましたなら、それこそ伊尹・霍光の再来でござろう」。さっそく栄は穆と義兄弟の契りを結んだ。穆が年長だったので、栄は彼を兄貴分とした。栄が盟主になると、穆も栄に拝を捧げた。そこで、成年に達した王子のうち、誰が帝位につくにふさわしいかをめぐって密議がなされ、その結果、晋陽（太原）において、王子の一人一人について像を鋳てみたが、どれも物にならず、ただ長楽王（子攸）の像だけは、円満な輝きをたたえた姿で、端正な見事な像にでき上がった。そこで栄の気持は長楽に決まった。さっそく奴隷の用人王豊を洛陽につかわし、革命の盟主となってい

ただきたい旨を申入れたところ、長楽王はすぐに承諾したので、共に旗上げの日取りを約束した。栄の三軍はみな喪服姿で、弔旗をかかげて南下した。太后は栄が挙兵したと聞くと、王公を召し集めて対策を協議した。このころ、太后の胡氏一族は寵をほしいままにしていたため、皇族たちに怨まれており、協議に加わった者は進んで意見を述べようとしなかった。ただ黄門侍郎の徐紇だけが言上した、「尔朱栄は馬邑(注略)のケチな胡です。人物は凡庸なくせに、おのれの分をわきまえず力も量らずに、長い戟を朝廷に指し向けるとは、蟷螂が鎌を振り上げて車輪に立ち向かうというもの、下に火種のある薪の山の上で、まだ火が付かぬとばかり寝転んでいるようなものです。いま宮中守護の文武官は一戦を交えるに十分な数がありますので、ただ河橋(注略)だけを守って、彼らの出かたを見ると致しましょう。栄は遠路の行軍のため、兵隊どもは疲れ果てています。こちらはじっとしていて疲れた相手を迎え撃つのですから、打ち破ることは必定です(注略)」。太后は紇の進言をうけがい、直ちに都督の李神軌(注略)と鄭季明(注略)らに命じ、五千の兵を率いて河橋を固めさせた。

四月十一日、栄は河内を通って、高頭駅に達した。長楽王は雷陂から河を北へ渡って、栄の陣営に赴いた。神軌・季明らは、長楽王が栄の側についたと知ると、陣門を開いて栄に降った。十二日に栄は芒山(注略)の北、河陰の野に布陣し、十三日に百官に通達して新帝に拝謁するよう命令し、やって来た者をば残らず殺した。このとき王公・卿士およびもろもろの朝臣たちで、死んだ者は二千余人に及んだ。十四日、新帝は洛陽に入城し、天下に大赦を行なって、年号を建義元年と改めた。これが荘帝である。

この時は、大戦乱が終ったばかりで、重だった人たちはすべて殺され、逃げ隠れた者たちは恐れおののいて影をひそめていた。荘帝は初めて帝位につくと、仁政を垂れる旨の布告を出したが、御前に参上したのはただ散騎常侍の山偉一人だけであった。栄に使持節中外諸軍事大将軍・開府北道大行台・都督十州諸軍事大将軍・領左右太原王の位を加え、天穆を侍中太尉公とし、并州刺史・上党王を世襲させた。その他、一躍して公卿や地方長官となったものは、数え切れぬほどであった。

二十日、洛中の人々はびくびくもので、依然として落ち着かなかった。死者も生者も怨念がこもって、誰もが互いに不信の念を抱いていた。貴族と豪族たちは争って家を捨てて逃亡し、貧者や下層民も老人・子供もこぞって逃げ出した。そこで詔を出して、いわれなく死んだ者には漏れなく贈位することとし、三品以上の死者には三公を、五品以上の死者には令僕を、七品以上の死者には州知事を、無官の死者には郡知事を贈位する旨を布告した。そこでどうにか人心は収まった。帝は栄の娘を納れて皇后とした。そして栄の官を進めて柱国大将軍・録尚書事とし、その他の官位はもとのままとした。また天穆の官を進めて大将軍とし、その他の官位はみなもとのままとした。

永安二年(五二九)五月、北海王の元顥は再び洛陽に入り、この寺に陣を構えた。

顥は荘帝の従兄であった。孝昌の年の末に汲郡の知事をしていたが、尔朱栄が洛陽に入ったと聞いて、南へ逃れて蕭衍(梁の武帝)に身を寄せていた。この年、彼が洛陽に入城すると、荘帝は北へ蒙塵した(注略)。顥は帝位に就くと、年号を建武元年と改めた。顥は荘帝に以下のような書簡を送った——

「今や大いなる道は世に現われず、天下は公正さを失ったままです(注略)。悪は禍を招くことなく、善は福を呼ぶことなく、民の信任を得て位

に就くという大義も絶えています。朕の如き者でも、いにしえの五帝にあやかって徳によって天下を譲られんことをこそ願え、武力にものを言わせよう存念はありませぬ。さてこそ玉座を塵芥とも見なし、帝位を一文銭並に思っております。皇帝の尊貴を狙うつもりもなく、天下の財宝を占めようとの企みもありませぬ。ただ尔朱栄が昨年洛陽に入るや、初めは殊勝に勤王に励みましたが、終りには魏に仇なす賊となりました。逆にした刃で皇親（胡太后と幼主）を害し、鋒先きを大臣たちに奮いました。かくて魏の王室は老いも若きも、生き残りは殆んどありませぬ。彼は斉を奪ったあの陳恒の野心を抱くばかりか、晋を分割したあの六卿の謀略もないとは言えませぬ。ただ、今は天下が混乱の極にあり、簒奪したくも具合いが悪いため、しばらく君臣の関係を保って、宰相の座にいるという形を取っているだけです。そなたの兄と弟を殺め、傲然たる独裁者として、暗愚の君に仕えつつ時機到来を狙っているのです。彼の忠義ぶりが、果たしていつまで続くものでしょうか。朕はこのさまを見て寒気を催し、そこで遠く江南に身を寄せ、泣いて梁朝に懇請し、恥をすすがんものと心に誓った次第です。かくて、風のごとく建業（梁の都）に赴き、〔その助勢を得て〕電のごとく洛陽へ馳せ向かったわけは、今や尔朱栄の罪を糺し、そなたの手枷足枷を解き放ち、非業の死者の怨念を慰め、倒さ吊りの人民の苦難を救おうとの所存でした。実はそなたが意気投合して、親しく会いに来られた上、ともどもに辛苦の思いを語り合い、手を携えて兇悪の胡討伐に立ち上がられるものと期待していましたところ、あに計らんや、朕の軍が成皐に進攻するや、そそくさと河を渡って北へ逃走された。兇手に脅かされて、意にまかせぬ情況だったとしても、或いはそなたに日頃から不信の念があり、私を貪欲な野心家と疑っておられたのかも知れぬ。北へ逃げられたと聞いて、そぞろに気落ちした次第です。なぜかと申せば、朕とそなたとは、兄弟も同然の縁、同じ幹から分れた枝同志、栄えるも枯れるも一つに結ばれた間柄です。たとい兄弟は内に鬩ぐとも、外の侮りには力を合わせるもの。まして私とそなたとは、かねて心を許し合った親密な仲。いざ危難に臨んでは、兄弟にまさる頼りはないといいます。しかるに肉親を棄てて仇敵に就くとは、一体どこに筋道が立つと言うのです。それにあの尔朱栄の、臣下にあるまじき無道さは、万人の目に明らかなところ。魏の天下を奪わんとの企みは、賢者も愚者もひとしく知るところです。しかるに、そなたは事の次第を見て取っていながら、まさかそうなるとは限るまいと、おのが命を豺狼に預け、おのが身を虎の口に任せ、肉親を棄てて賊を助け、兄弟が互いに武器を取るという事態を作った。そなたが仮りに少々の土地を手に入れても、もともとそれは栄の所有。たとい城を占領しても、そなたの物にならぬは必定。いたずらに魏の国を危くさせて、仇敵をはびこらせるだけのこと。かの王莽をうれしがらせ、卞荘に味を占めさせるだけです。有識者はみな、そなたのことを恥ずかしく思っています。今や魏の国の興敗は、そなたと私とにかかっています。もし天道の加護あらば、今こそ誓って義挙を起こすべきです。さすれば偉大なる魏の国運は、天壌とともに無窮でありましょう。もしも天道がこの世の戦乱を嫌わず、なおも胡賊が滅びぬままに、不吉な鳥が叫び続け、狼どもが喰らい歩いて、次々と河北の地が食われてゆくとすれば、栄にとってはこれ幸いでしょうが、そなたにとっては禍です。他人ならぬそなたなればと、ここに便りを認めて意を述べました次第。なにとぞ再思三考せられ、義と利の両面より考慮せられるならば、富も地位も安泰となりましょう。ああいう手合いの言うままになるのは、賢

扶盾武士俑
北魏　洛陽元邵墓出土

明なやり方ではありません。朕は断じて食言して、お互いが殺し合う結果を招くことはせぬ。なにとぞ上々吉の道を選びとり、悔いを後日に残されぬよう」

これは、黄門郎の祖瑩の代作であった。その時、荘帝は長子城（山西省南部）にいたが、太原王（尔朱栄）と上党王（元天穆）とが、帝の危急を救いに馳せつけた。六月、帝は河内を包囲したところ、太守の元桃湯と、車騎将軍宗正の珍孫らが、顥のために守りを固めていて、攻め落とすことができなかった。時あたかも炎熱の猛暑で、将士とも疲れ果ててしまった。太原王は帝を晋陽（太原）に移らせ、秋を待って再挙を図る計画を立てたが、決断がつかず、そこで劉助を召して卦を立てさせた。助の見立ては「必ず勝つ」と出た。そこで翌朝、全力を挙げて攻撃したところ、その占い通りとなった。桃湯と珍孫とは首を斬られて、陣頭高く掲げられた。

顥は河内が陥ったと聞くと、みずから将兵を指揮して出陣し、河橋を固める一方、特遷侍中の安豊王延明は、前進して硤石を守った。

七月、帝は河陽（黄河北岸）に達し、顥の軍と河を隔てて相対した。太原王は、車騎将軍の尔朱兆に命じて隠密に渡河させ、延明を硤石で撃破した。延明が敗れたと聞いて、顥の軍も散り散りに敗走した。その指揮下にあった江南・淮南出身の将兵たちは、みな鎧を脱いで啼泣しつつ、手を握り合って訣別した。顥は数十騎とともに蕭衍のもとへ馳せ帰ろうとしたが、長社（河南長葛県）まで来た時、そこの住民に首を斬られ、その首は都へ転送された。

二十日、帝は洛陽へ帰還し、太原王に天柱大将軍の位を加え、その他の官はもとのままにした。上党王には太宰の位を加え、その他の官はもとのままとした。

永安三年、逆賊尔朱兆は、帝をこの寺に幽閉した。

その頃、太原王は位は人臣を極めて驕慢となり、功績の高さを誇って放縦となり、勝手気ままに賞罰を行ない、やりたい放題に判定を下だした。荘帝は怒って侍臣たちに言った、「朕はむしろ高貴郷公の死にかたを選ぶ。漢の献帝の生きざまはせぬぞ」

九月二十五日、帝は太子が生まれたと言い触らした。栄と穆とがそろって参内すると、帝はみずから栄を明光殿で斬った。穆は伏兵の魯暹に殺され、栄の長子の部落大人も同時に殺された。栄の部下の車騎将軍尔朱陽都ら二十人は、栄に随従して東華門から入ったところを、やはり伏兵に殺されてしまった。ただ右僕射の尔朱世隆は在宅のままでいたが、栄が殺されたと聞くと、栄の部曲（私兵）を召集して、西陽門を焼き払って後、河橋へ転進した。

十月一日になり、世隆と栄の妻の北郷郡長公主は、芒山の馮王寺に行って、栄の追善供養を営んだ上、直ちに尔朱侯に命じて討伐に向かわせた。尔朱那律帰らは胡騎一千を率い、全員が白い喪服を着て城外へ来ると、太原王の屍を要求した。帝は大夏門に登ってそれを観望し、主書の牛法尚をつかわして帰らに伝えさせた——

「太原王は功を立てたが終わりを全うせず、ひそかに大逆を企てた。王法は私情を容れず、すでに律に照らして処断した。その罪は栄一人にとどめ、余人はみな不問に付する。そちたちはなぜ帰順せぬか。

官爵はもとのままにしてやるぞ」

帰が言うには、

「臣は太原王に従って朝見に罷り出ましたのに、思いも寄らぬ今日の非道なお仕打ちは何としたことです。臣は晋陽に引上げるつもりながら、手ぶらでは帰れませぬ。太原王の屍をいただけますれば、たとい死んでも恨みはありませぬ」

と、しとどに涙を流しながらの言上。悲しみを抑え切れぬ風情である。居ならぶ胡人たちはみな慟哭し、その声は都じゅうを震るわせた。それを聞いて帝も胸痛む思いをし、侍中の朱元竜に鉄券を持たせて世隆に授け与えさせ、「死罪を免除してつかわし、官位はもとのままとする」と伝えさせた。すると世隆は元竜に言った、

「太原王はその功は天地にも至り、その道は生民を救い、赤誠もて国に奉ぜられしこと、神明も照覧したもうところ。しかるに長楽は信義を守らず、むざと忠良の人を害めた。いま二行の文句を刻った鉄券を呉れたところで、何の当てにもなるものか。おれは太原王の讎討ちをやる。断じて帰順はせぬぞ」。元竜は、世隆が帝を長楽と呼び捨てにしたのを聞いて、帰順の心なしと見て取り、ともかくそれを帝に報告した。帝はさっそく宮中の庫の物を出して宮城の西門の外にならべさせ、世隆討伐の決死隊を募ったところ、一日で一万人が集まった。そして帰らと城外で戦ったが、叛軍の勢はくじけなかった。帰らは何度も戦場をくぐっているだけに、武器の扱いは手慣れていたが、都の兵士たちは野戦の経験がなく、みな義勇の士ばかりではあったが、その意気に武力が伴わなかった。三日間ぶっ通しに戦ったが、しかし胡兵の妖気は消えなかった。帝はさらに志願者を募って河橋を断つことにした。漢中の出身の李苗が水上作戦を試み、上流から火を放って橋を焼き払った。世隆は橋が焼かれたと見ると、近在の住民を略奪し尽くして、北のかた太行山へ引き上げた。帝は侍中の源子恭と黄門侍郎の楊寛に命じて、歩兵と騎兵三万を率いて河内を固めさせた。

世隆は高都（今の山西晋城県の東北）へ着くと、太原の太守の長広王曄を新主として擁立し、年号を建明元年と改めた。そして尒朱氏の一族で自ら王と名乗った者が八人あった。

長広王は晋陽を都とし、潁川王の尒朱兆に命じて兵を挙げて洛陽に進攻せしめた。これを迎えた子恭の軍は守りを失って壊走した。兆は雷陂から黄河をおし渡って、荘帝を式乾殿で擒にした。帝は当初、黄河は流れが急だから、兆はおいそれとは渡れまいと思っていたが、予想に反して兆は舟によらずに、流れをおし渡って来たのである。この日は水が浅くて馬の腹まで達しなかったので、こういう災難に見舞われる破目になったわけで、〔黄河がこれほど浅くなったとは〕前代未聞のことであった。

衒之はこう思う——むかし後漢の光武帝が天子たるべく運命づけられていた時、俄かに滹沱河が氷結して難なく渡河できたし、また蜀の劉備が危難を避けた時、その乗馬の的盧は泥の溝から高く跳躍したという。いずれも、理としてそうあるべき天の定め、神霊の加護なのであり、さればこそこの二人は天下の功業を成しとげ、大い

持盾俑
北魏　洛陽元邵墓出土

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com